

## 筋性斜頸に伴う環軸椎脱臼の1例

自治医科大学とちぎ子ども医療センター 小児整形外科

鈴木 貴大・小沼 早希・渡邊 英明・吉川 一郎

**要旨** 【背景】筋性斜頸には非対称性骨格変形を来す報告が散見されるが、環軸椎脱臼の合併の報告は少ない。環軸椎脱臼を合併したために早期に手術を行い、環軸椎脱臼が改善した症例を経験したので報告する。【症例】3歳、男児。生下時から認める左筋性斜頸に対して経過観察されていたが、自然治癒を得られず、当科受診。頸部CTにて環軸椎脱臼を認めたが神経症状はないため、筋性斜頸に対して腱切離術を施行。術後CTで環軸椎脱臼は改善した。その後も脱臼や斜頸が再発することなく経過している。【考察】筋性斜頸は、1歳ごろまでに自然軽快しない場合に手術が検討される。非対称性骨格変形を有する場合に6歳以降の手術で変形の残存率が高くなるため、後療法が可能な3~4歳前後での手術が望ましいとされる。自験例は早期に手術を施行したことで環軸椎脱臼は改善し、術後1年で再発もない。非対称性骨格変形を合併する筋性斜頸は、早期に手術を行ったほうがよいかもしい。

### はじめに

筋性斜頸の90%は、1歳までに自然軽快するとされているが、斜頸位が継続すると頭部変形や顔面非対称が生じる<sup>1)</sup>。非対称性骨格変形や脊椎変形を来す報告は散見されているが<sup>5)6)</sup>、筋性斜頸による二次的な頸椎変形の報告は少ない。今回、1歳までに自然軽快しなかった筋性斜頸に環軸椎脱臼を合併した症例を経験したので、報告する。

### 症例

**症例:** 3歳、男児

**主訴:** 左斜頸位

**現病歴:** 出生時から左斜頸を認めており、近畿整形外科で経過観察されていたが、自然治癒を得られなかったため手術目的に紹介となった。

**初診時所見:** 左斜頸位あり。胸骨枝の緊張が非常に強く、左回旋制限を認めた。顔面は非対称性



図1. 初診時所見  
左斜頸位であり、左回旋制限(左回旋0°)を認める。顔面は非対称性に变形している。

**Key words:** congenital muscular torticollis(先天性筋性斜頸), atlantoaxial dislocation(環軸椎脱臼), asymmetrical skeletal deformity(非対称性骨格変形)

**連絡先:** 〒 329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1 自治医科大学とちぎ子ども医療センター 小児整形外科 鈴木貴大  
電話(0285)44-2111

**受付日:** 2019年3月4日

に変形していた(図1)。頸部痛や四肢麻痺, 感覚障害は認めなかった。術前のX線像では環椎歯突起間距離が2.5 mmと正常上限であった。頸椎の変形を疑い, CTを施行したところ, 環軸椎の脱臼を認めた(図2)。

**手術:** 神経学的所見を認めないことから, 腱切断術の方針とした。左胸鎖乳突筋の胸骨枝, 鎖骨枝の下端のみを切離した。

**経過:** 術後3日目のX線像で環椎歯突起間距離は1.8 mmと正常範囲内となっており, 疼痛も自制的で外来フォローアップとした。後療法は術後1

か月頸椎カラーを装着した。術後4か月の時点では回旋制限は残存していたが, 術後7か月の時点では回旋制限は改善していた(図3)。また, 術後1年でのCTで環軸椎脱臼は整復されていた(図4)。

### 考 察

先天性筋性斜頸は, 一側の胸鎖乳突筋の一部が腫瘤となった後に線維化することで, 頸部の健側への側屈と腫瘤のある患側への回旋が制限される病態である。

本症例は頸部痛もなく, 腱切断術後に環軸椎脱



図2. 左から頸椎レントゲンの側面像, 頸椎CTの後面, 頸椎CTの左側面  
頸椎レントゲンではADI 2.5 mm, 頸椎CTでは左環軸椎関節の脱臼を認める



図3. 術後7か月  
回旋制限は改善した(左回旋90°)。

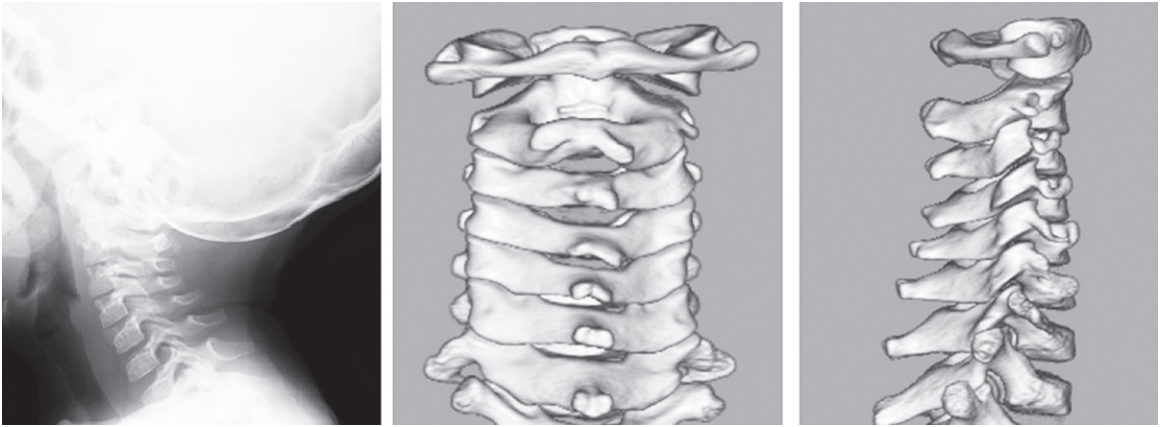


図4. 術後1年での頸椎CT  
左環軸椎関節の脱臼は整復されている。

臼が改善していたことから、環軸関節回旋位固定や骨性斜頸よりは筋性斜頸による環軸椎脱臼と考えた。

筋性斜頸に環軸椎脱臼が発生する原因に関する報告はほぼない。Down症候群における環軸椎脱臼の原因としては、環軸椎靭帯や横靭帯などの弛緩と軸椎歯突起の形成異常が挙げられる。本症例においては、診察上は明らかな関節弛緩性は認めなかったが、関節弛緩性や靭帯弛緩性の素因があったのかもしれない<sup>7)</sup>。

筋性斜頸の多くは1歳ごろまでに可動域は改善し、改善しない場合には手術を検討するが、筋性斜頸に伴う変形防止のための最適な手術時期、術式、後療法に一定の定説はない<sup>2)</sup>。

ただし、14歳以上で筋性斜頸による頸椎変形を来した報告があり<sup>4)</sup>、また、非対称性骨格変形を有する筋性斜頸は変形が残存する確率が高くなるため、5歳未満での手術が望ましいとする報告がある<sup>3)</sup>。

本症例は無症状の環軸椎脱臼を認めていたが、3歳の時点で手術を行い、術後1年の時点では頸椎の変形や環軸椎脱臼の残存は認めていない。非対称性骨格変形、脊椎変形を有する筋性斜頸は、早期に手術を行ったほうがよいのかもしれない。

#### まとめ

無症候性の環軸椎脱臼を合併する先天性筋性斜

頸の1例を経験した。非対称性骨格変形、脊椎変形を有する筋性斜頸は、早期に手術を行ったほうがよいのかもしれない。

#### 文献

- 1) Cheng JC et al : Outcome of surgical treatment of congenital muscular torticollis. Clin Orthop Relat Res 362 : 190-200, 1999.
- 2) 飯岡 隆ほか：先天性筋性斜頸の術後成績. 整形外科と災害外科 43(4) : 1454-1456, 1994.
- 3) Lee JK et al : Change of craniofacial deformity after sternocleidomastoid muscle release in pediatric patients with congenital muscular torticollis. J Bone Joint Surg Am e93 : 1-7, 2012.
- 4) 増田謙治ほか：筋性斜頸に対する手術成績—上下端切腱術の手術年齢での比較—. 日本小児整形外科会誌 23(1) : 158-161, 2014.
- 5) 西山正紀ほか：著明な鎖骨角状変形、交差咬合など非対称性骨格変形を生じた筋性斜頸の1例. 臨整外 52 : 1011-1014, 2017.
- 6) 薄井陽平, 山田一尋：筋性斜頸による顔面非対称と上顎骨劣成長を伴う両側側方歯部交叉咬合症例. 甲北信越矯正歯科学会雑誌 21 : 19-27, 2013.
- 7) 渡辺航太：ダウン症候群に伴う環軸椎不安定症. 脊椎脊髄ジャーナル 32(3) : 217-221, 2019.